

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】高道由子

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】グローバルな労働移動と手仕事の価値の再編：現代ネパールにおける手織布ダカの事例から

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、他国への労働移動が急増するネパールで手仕事の価値がどのように再編されているかを、人々の仕事観の変容との関連から解明することであった。その検討を通じて、世界的に問い直されている仕事の価値や意味の議論に貢献する。ネパールでは1990年代以降、他国への労働移動が増加の一途を辿っている。このようなグローバルな移動の常態化の中で人々は、日常に不可分に存在していた行為や時間が、ある文脈では仕事として、別の文脈では暇つぶしや趣味として細分化される経験をしている。本研究では、仕事や労働に関連する現地の概念がどのような意味を持ち、それがどのような変化してきているかを詳細に検討した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

研究内容: 研究内容は次の3点であった。まず、①居住先国で人々はどのように仕事を体験しているかである。ネパールから他国への労働移動の歴史的展開や政治的・制度的状況などのマクロの状況について調査した上で、居住先国における仕事の経験と日常生活について実証的に調査を行った。次に、②他国への労働移動の経験が地域社会の生活世界や「より良い」暮らしのイメージにどのような影響をもたらしているかである。不在家族を抱える世帯への生業や生活に関する聞き取りや参与観察を行い、ネパールにおける仕事観の変容の様相に関する調査を行った。最後に、③他国への労働移動の経験や仕事観の変容が手仕事の価値の再編とどのように結びついているかである。

研究方法: 東ネパール・テラトゥムを中心に調査を行った。東ネパールはダカの生産地として知られ、かつ歴史的にグルカ兵を多く輩出し、その資金を活用した他国への労働移動が多い地域である。調査方法はネパールの調査地においては、仕事や生業に関する聞き取りと参与観察と、現地のリンブー民族団体キラート・ヤクトウン・チュムルン(KYC)の集会やネパール各地の支部へ訪問、政府への抗議活動などへ帯同しながら実施した。当初日本では仙台での調査を予定していたが、滞在を予定していた方の引越とコロナ禍の都合上訪問することができず、東京の新大久保で開催されたリンブー民族の民族集会に参加し、移住者への聞き取り調査を行い、その後は主にSNSでのやりとりや通話ベースで調査を実施した。

【結論・考察】(400字程度)

リンブー民族団体の活動では、さまざまな手仕事が民族を象徴する場面で用いられていた。他方で、他地域での仕事の経験のある人となない人との間で、その手仕事に対する評価や対応が分かれていることが明らかになった。

1989年に設立されたKYCは、本部、2州、13郡のネパール国内支部と11の外国支部がある。KYCは先行研究では、国家に対する長い抵抗による、領土、言語と文字、歴史に関する強い認識があり、民族団体が最も活発に運営されていると述べられてきた[Hangen 2010: 41, 42]。他方で本調査においては、KYC内部での歴史解釈をめぐる対立や宗教の多様化、支部ごとの経済的格差が表面化しつつあることが明らかになった。

近年KYCの総会は、ネパールの中でもリンブー民族の人口の少ない地域で実施されている。調査時は、チトワン支部が実行役として開催され、そこではダカ織りや手間暇のかかる保存食が、東ネパールの村から「手配」され、総会の中でも民族内外にリンブー文化を「見せる」場面において、象徴的に扱われていた。他方で総会のプログラムを非常に効率的に行う、出稼ぎ経験のあるメンバーを中心としたチトワン支部の実行役に対して、

「村のような仕事をしている人はここにはなくて、みんなビジネス (business) をしている。私たちとは違う人々のように見える」と語る東ネパール出身の人もいた。また総会に出席していた香港支部から提案された、村でつくられた布や保存食を総会で売り、総会の開催費用を稼ぐ案に対しては、東ネパール出身者や居住者を中心として、反対意見が相次いでいた。

ここには、仕事観の中でも、特に手仕事における労力 (*mehnat*) を共有することと、それを金銭で相殺しようとすることに対する捉え方の違いがあると考えられた。